

2017年9月17日川越教会

わずかな仲間

【聖書】 士師記7章1～8節

エルバアル、つまりギデオンと彼の率いるすべての民は朝早く起き、エン・ハロドのほとりに陣を敷いた。ミディアンの陣営はその北側、平野にあるモレの丘のふもとにあった。主はギデオンに言われた。「あなたの率いる民は多すぎるので、ミディアン人をその手に渡すわけにはいかない。渡せば、イスラエルはわたしに向かって心がおごり、自分の手で救いを勝ち取ったと言うであろう。それゆえ今、民にこう呼びかけて聞かせよ。恐れおののいている者は皆帰り、ギレアドの山を去れ、と。」こうして民の中から二万二千人が帰り、一万人が残った。主はギデオンに言われた。「民はまだ多すぎる。彼らを連れて水辺に下れ。そこで、あなたのために彼らをえり分けることにする。あなたと共に行くべきだとわたしが告げる者はあなたと共に行き、あなたと共に行くべきではないと告げる者は行かせてはならない。」彼は民を連れて水辺に下った。主はギデオンに言われた。「犬のように舌で水をなめる者、すなわち膝をついてかがんで水を飲む者はすべて別にしなさい。」水を手にすくってすすった者の数は三百人であった。他の民は皆膝をついてかがんで水を飲んだ。主はギデオンに言われた。「手から水をすすった三百人をもって、わたしはあなたたちを救い、ミディアン人をあなたの手で渡そう。他の民はそれぞれ自分の所に帰しなさい。」その民の糧食と角笛は三百人が受け取った。彼はすべてのイスラエル人をそれぞれ自分の天幕に帰らせたが、その三百人だけは引き留めておいた。ミディアンの陣営は下に広がる平野にあった。

【序】 士師記時代のハイライト

イスラエル民族の先祖**アブラハム**は、文明の発祥地の一つ、メソポタミア地方から、紀元前 2000 年ごろ、神に導かれてパレスチナ地方に移住しました。しかし**ヤコブ**の代の紀元前 1700 年ごろ、ひどい飢饉に見舞われて、エジプトに移住します。そして 400 年後に**モーセ**を指導者にエジプトを脱出し、40 年かけて**カナンの地**に戻ってきました。紀元前 1250 年頃と言われています。

「**乳と蜜の流れる地**」と表現される肥沃なヨルダン川、キシオン川流域の農作地帯には、当然ながら**他の民族**が移住していて、豊かな暮らしをしていました。そこへエジプトを脱出してきた**遊牧の民イスラエル**が、神から与えられた地に戻って来たのだからと言って、定住しようとしたのです。当然、大きな摩擦と混乱が生じました。そしてサウル、**ダビデ**、**ソロモン**と続く**イスラエル王国**の時代が始まる紀元前 1020 年までの**約 200 年余の混乱**が、**士師記の時代**です。

「**ヨシュアの死後**」という言葉で書き始められた士師記には、**12 人の士師**が登場しますが、最も有名な士師が**ギデオン**です。聖書教育では9月の4回の日曜の学びのうち3回を、このギデオンに当てています。今日はその第2回目。先週山下先生が序論をなさいました。今日は、ミディアンの大軍を打ち負かしたギデオンの生涯の**ハイライト**からの学びです。

[1] ギデオンの大勝利

広大な砂漠の地をさまようミディアン人が、東方の諸民族と共に攻め上って来ました。軍勢だけでも135,000人です。人もらくだも、数知れいなごの大軍のように押し寄せてきて、命の糧となるものをことごとく奪い去ってしまいます。イスラエルの人々は、主に助けを叫び求めました。

主なる神は、ギデオンを選んで士師として、この大軍に立向かうようにお命じになりました。彼はイスラエル12部族の中でも一番小さなマナセ族の中の、貧弱な家の一番年下の若者でした。尻込みするギデオンを「そのままのお前でよいから、立ち上がりなさい。わたしがあなたを選び、共にいるから」とおっしゃいます。(6:14)彼は遂に決心して兵と募ると、32,000人が集まってくれました。彼はどんなに心強かったことでしょう。

しかし主はおっしゃいました。「多過ぎる。恐れおののいている者は帰れと、呼びかけよ」。ギデオンがその通りに命じると、22,000人も兵士が家に帰って行きました。モーセの律法にも、戦争をする場合に、これこれの条件に該当する者、また恐れひるんでいる者は家に帰りなさい(申命記20章)と規定されています。ですから、家に帰っても、少しも不名誉ではないのです。いいですね。

さて10,000人になってしまいました。何しろ敵軍は135,000人なのです。しかし主はおっしゃいます。「民はまだ多すぎる」。そして水の飲み方で兵を選り分けよとお命じになりました。すると水辺に膝をつき、かがんで飲んだ者がほとんどで、手で水をすくって飲んだ者は300人しかいませんでした。顔を水に近づけ、口から直接飲めば、飲みたいだけ直ぐ飲めます。でも戦場でそのように振る舞うのは、敵に隙を見せる危ない姿勢です。主はおっしゃいました。「手で水をすくって飲んだ300人をもって、わたしはあなたたちを救い、ミディアン人をあなたたちの手に渡そう」。

この僅か300人で135,000人の敵をどうやって打ち負かすことができるのでしょうか？主はギデオンに戦略をお授けになりました。それが7章の16節以下に記されています。300人を三つの小隊に分け、全員に角笛と空の水がめを持たせ、水がめの中に松明を入れさせ、夜のうちに敵の陣営を包囲する。そして、ギデオンの角笛を合図に300人全員が一斉に角笛を吹き、水がめを割って松明をかざす。寝込みに不意をつかれた敵陣は、総立ちになって同士討ちを始め、混乱のうちに敗走し始める。その敵軍をイスラエル全軍が追撃して全滅させる。

戦いは、戦略通りに運びました。ギデオンはヨルダン川を渡り、砂漠の中をどこまでも追撃して、ミディアン軍の二人の王を討ち取り、全滅させる大勝利を得ました。そしてかつてはモーセの妻ツィボラ(出エジプト2章)を生み出したミディアン族の存在は、これ以後聖書の舞台から消えてしまいました。

[2] 手を引いてしまわれる神の心

神はどうして、「民は多すぎる」(2節)「民はまだ多すぎる」(4節)と二度にわたって、減らすようにお命じになったのでしょうか。それは自分の力で救いを勝ち取ったと思い違いをさせないためだと、

はっきりおっしゃっています。

ギデオンが士師になるように命じられた時、彼自身尻込みして、訴えました。「わたしの一族はマナセの中でも**最も貧弱な者**です。それにわたしは家族の中で、いちばん年下の者です」(6:15)。しかし神は「あなたの**その力**をもって行くがよい。あなたはイスラエルを、ミディアン人の手から救い出すことができる。**わたしがあなたを遣わす**ではないか」。

ギデオンが**偉大な能力の持ち主**だから、士師に選ばれたのではない。神ご自身がイスラエルの民を救い出してくださるのです。だから「お前は**そままの自分**でよい」。これが神の御心なのです。そこでギデオンはその御心を**素直に信じて**、召命に応じて立ち上がったのでした。だから「民が多すぎる」「民はまだ多すぎる」という神の言葉に、**素直に聞き従う**ことが出来たのです。ここが、**ギデオンの偉い所**ではないでしょうか。

減るということは、誰にとっても心細いものです。反対に**増える**ことは何とも頼もしいことです。だから私たちは神に、**増える**ことを願い求めます。あの富める青年も、主イエスから一切を捨てることを勧められると、顔を曇らせて去っていきました。永遠の命を得るために、**先ず減らす**ことを求めた主イエスに、ついて行くことが出来なかったのです(マルコ福音書10.:17～22)。

いなごの大軍のようなミディアンの大軍に対して味方の兵が一人でも減ることは大問題です。しかしギデオンは主の言葉に聞き従いました。「**少数で戦え**」と命じられた神、**全能の神に依り頼む信仰**を貫いたのです。

今年**マルチン・ルター**が免罪符に対する95条の質問書を提示し、**宗教改革**が始まって**500年記念**に当たります。そのルターがこう言っています。「神は世界を**無から創造**された。この私も**無**にならなければ、神の御業は行われぬのだ」。自分の力に少しでも頼ろうとする時、「それは良くない。あなたの**滅び**になる」と心を痛めて、**神は手を引いてしまわれる**のですね。

[3] 神風を期待して負けた戦争

神の助けを呼び求めるということに関して、もう一つ私の心に湧いてくる思いがあります。私たち日本人が**大東亜戦争**と呼んだ世界を相手の戦いで、惨めな敗戦を被った戦争の末期に、海軍航空隊は、帰りのガソリンも持たず身軽にして、大きな爆弾を抱えた戦闘機で海上すれすれに飛行し、敵の軍艦に突っ込み自爆する**特攻作戦**を実施しました。多くの飛行機が手前で撃墜されて余り効果はなかったようですが、わが身をもって敵に飛び込んでいく**決死隊**の働きは、戦時中の日本国内では**神風特攻隊**といって、大いに称賛されました。

その**神風**という言葉の由来は、紀元1274年鎌倉幕府時代に、ヨーロッパからアジア全域に支配権を確立した大帝国元の大軍が、その支配に服せず独立を守る日本を従えようと、大船団で北九州に攻めて来た時のことです。第一回目は博多湾に上陸し、一帯を攻略しただけで一旦引き上げ

ていきました。しかし7年後に、大艦隊で再度攻めて来たのです。ところが**大きな台風**が襲ってきて、艦隊の多くの船が博多湾沖で沈没、やむなく引き返して行きました。

わが国は幸運にも大台風のお蔭で守られたのでした。これが**元寇(げんこう)**と呼ばれる歴史的な事件です。そこで私たちは、日本が天照大神の子孫である天皇陛下を君主に戴く**神の国**だからこそ、神はあのように**神風**を送って、世界大帝国の元の攻撃からも国を護って下さった。いざという時には**神風が吹いて**、日本は護られるのだ」という信仰を、私たちは学校で、繰り返し教えられたのでした。そして戦争の末期に、身命を賭して敵の大艦隊に体当たりの攻撃を仕掛ける作戦を、**神風特攻隊**と呼んで称賛したのでした。しかし神風は起こらず、日本は負けてしまいました。

天皇の威光の下に、アジア諸国が共に栄えていくという**大東亜共栄圏**を旗印に掲げた **15 年戦争**でしたが、それは日本の**エゴイズム**の発露であって、**神の御心ではなかった**が故に、惨めな敗戦という**神の裁き**が下ったのでした。私たちは、この反省もまた忘れてはならないと思います。

[結] 失うことで与えられる信仰

ギデオンの生涯は、8～9章と読み進めていきますと、家庭的には、後に**大きな悲劇**を発生させるものでした。ですから**立派な生涯**だったと必ずしも言えません。でもそれが私たち**人間の在るがままの姿**なのでしょう。その**マイナス**の面を、わが身の自戒として受け止めながらも、**ミディアン**の大軍に勝利したという素晴らしい功績からの**プラスの教訓**をこそ、しっかりと、受け取りたいと思います。

「民は多すぎる」「民はまだ多すぎる」。なんと**厳しい神の言葉**でしょうか。**減る**ということは、誰にとっても**心細い**ものです。反対に**増える**ことは何とも**頼もしい**ことです。だから私たちは神に、増えることを願い求めます。あの富める青年も、主イエスから一切を捨てることを勧められると、顔を曇らせ去って行きました。**永遠の命を得るために**、**先ず減らすことを求めた主イエス**に、ついて行くことが出来なかったのです。

ある人がギデオンの姿を「**地上の望**が次々と消されていく度に、**神への信仰**が強くされていった」と言っていました。私も人生の最晩年を迎えております。耳の聞こえが弱っていきます。歩く力も、そして記憶力も、落ちていきます。しかし、大事な兵士を手放していった**ギデオンの信仰**に強く励まされました。

失うことによって与えられていく、**主なる神への絶対的な信仰**を、私の身に着けていかなければならないと、思わされました。

お祈りします:主なる神さま。今日も私たちに、聖書を通してあなたのみ言葉を聞く礼拝をお与え下さって有難うございます。あなたは、小さな家族の最も若いギデオンをお召しになりました。特別に優れた能力を求めず、あるがままのあなたでよい、わたしがあなたと共にいるから、とおっしゃいました。大切なのは、あなたに全幅の信頼を寄せて、御言葉に聞き従っていくことでした。神さま、私に

もその信仰をお与え下さい。私を用いて恵みの業をなさろうとくださるあなたに、忠実に聞き従う者にして下さいますように、お願いします。そしてあなたのご栄光をお現してください。神さま、殺し合う戦争を止めさせてください。救い主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。

アーメン